

## 村岡典嗣「本居宣長」を座右に

福島健太郎

はじめに

これは、村岡典嗣の『本居宣長』を座右に、読者と宣長について学びたい思いから書いた随感である。

宣長の生涯は研究と講義に明け暮れし、変化に乏しい。従って、年譜は宝暦十三年まで見て、その後は割愛した。(本居宣長記念館用の「本居宣長年譜」も宝暦十三年までで止まっている)

本居宣長は、伊勢松坂の木綿商、小津家の出である。父は定利、母は勝。後に、商家の屋号小津を捨て、本居の性を名乗るのであるが、本居の出身は、尾張守平頼盛の六代の後胤、本居判官平建郷まで遡る。

しかし、来歴が確かなのは、北畠国司家阿坂城目付を務めた、十一代武連まで下る。宣長が「これ吾家の祖也」と言うのは、武連の次男、本居左兵衛武秀である。武秀は、国司家滅亡後、蒲生氏郷に仕えたが、九戸城の合戦で討死。長男延連は浪人となり、松坂の大阿坂村に住んだ。武秀の妻慶歩は、夫が戦死した時には懐妊で伊勢へ帰り、一志郡小津村の油屋源右衛門の家に身を寄せた。後に、源右衛門は松坂に移り、小津家と称した。武秀の遺子は、源右衛門の娘を娶り、小津家の別家を立てた。これが、宣長の五世の祖であり、宣長はこの家に出た。しかし、宣長の代には、本居家の血縁は絶えていた。全く小津家の血縁である。だが、後に医者に志し、本居の姓に復姓したのである。彼の遠祖は「数ならざりしかども、むげにいやしき民」ではなかった。

宣長は、享保十五年(一七三〇)、伊勢国松坂本町の木綿商小津定利の二男として生まれた。母は定利後妻の勝。実は長男なのであるが、養嗣子と定められた義兄がいた。宣長の誕生は、我が子を欲しがった父母が、吉野の水分神社に祈った結果であると信じられ、後に宣長も参詣している。

元文五年(一七四〇)、宣長十一歳の時、父定利は江戸の店で病死し、宣長と三人の弟妹は、母勝一人の手に育てられた。寛延元年(一七四八)十九歳になり、山田の紙商今井田家に養子にやられ、紙商売を始めたが、二十一歳の時、離縁して家に帰った。『家のむかし物語』に

は、「ねがふ心になはぬ事有しによりて」とだけ書いてある。翌年には義兄が病死。後始末をつけ、家督を相続した。

ここに特筆すべきは、宣長の家が代々熱心な浄土宗信者であったことである。十九歳の時に、菩提寺樹敬寺で、五重相伝を相承し、血脈を授かり、伝誉英笑道与の道号を受けている。村岡は宣長の古伝説信仰を、浄土宗信仰と垂加神道（母方の近親に垂加派の神道家があった）の両方から考えている。

義兄定治の死後、家督を相続したものの、江戸の店を失い、定治の遺産四百両を親戚の隠居家に預け入れて、その利息を財源として生活しなければならなくなった。しかし、隠居家の将来も当てにならない。

「此ぬし（定治）なくなり給ひては、恵勝大姉（母）みづから家の事はからひ給ふに、跡つぐ弥四郎（宣長）、あきなひのすぢにはうとくて、たゞ書をよむことをのみこのめば、今より後、商人となることも、事ゆかじ、又家の資も、隠居家の店おとろへぬれば、ゆくさきうしろめたし、もしかの店、事あらんには、われら何を以てか世をわたらん、かねてその心づかひせではあるべからず、然れば弥四郎は、京にのぼりて学問をし、くすしにならむこそよからめ、とぞおぼしおきて給へりける」（『家のむかし物語』）。子を見ること親に如かず。更に、男勝りで賢明な母勝である。宣長が到底商人に不適であることを見ぬき、彼を医者にしようとしたのである。果たして、隠居家の将来も彼女の予想した通りとなった。こうして、宝暦二年（一七五二）二十三歳の三月、医学修行のため上京した。

上京すると、医学の準備のため、堀景山に入門し、寄宿して儒学を学んだ。この頃、性を本居に改めている。景山は、藤原惺窩の高弟杏庵の曾孫にあたり、代々安芸藩に仕える朱子派の学者であったが、反朱子学の新興学問にも理解を持ち、荻生徂徠・伊藤東涯などとも交流があった。また、国文、和歌にも造詣が深かった。堀塾で宣長が学んだ漢籍を一々列挙することはしないが「よのつねの儒学」だと彼は言っている。しかし、読書力を養い、学問の基礎を固め得たとは言えるだろう。景山が宣長に与えた影響がどれほどのものであったかは疑問だが、彼に師事したことは宣長に幸いしたのである。

宣長の京都遊学中、最も注目すべきは、契沖の著書に接したことであるが、その機縁となったのが、師景山である。景山は契沖の門人今井似閑の門人樋口宗武と親交があり、契沖の著書『百人一首改観抄』は、景山が宗武とともに刊行したもので、宣長はこれを借覧し、初めて契沖の学問に接した。これにより、彼の古典研究への眼は開かれたと言えるだろう。「さて京に在しほどに、百人一首の改観抄を、人にかりて見て、

はじめに契沖といひし人の説をしり、そのよにすぐれたるほどをもしりて、此人のあらはしたる物、余材抄勢語憶断などをはじめ、其外もつぎくに、もとめ出て見けるほどに、すべて歌まなびのすぢの、よきあしきけぢめをも、やうくにわきまへさとりつ」（『玉勝間』）。

宣長は、幼少の頃から読書を好み、師にもつかず、独学で、あるにまかせ、得るにまかせ、和漢の書を手当たり次第に読んだ。十七八の頃から和歌を始め、京都遊学時代には儒学を学びながら、和書の学に一層興味を持ち、古典や中世の歌学書などを熱心に学んだ。村岡が言うように、契沖の著書に接したことは、彼が、生涯の学問に入る機縁となつたのではないか。彼の最初の師は契沖だと言つてもいいだろう。

景山のもとに寄宿したのは、宝暦二年（一七五二）から同四年までの二年と数ヶ月であつたが、景山死去まで教えを受けた。その間、同三年に、堀元厚に入門し、医学を学んだ。この頃、名を健蔵と改めている。元厚没後、宝暦四年（一七五四）二十五、宣長と同じく景山門であり、小児科医の武川幸順に入門、寄宿する。翌年、二十六歳になり、名を宣長と改め（号を春庵または舜庵）、医者となる。本居宣長の誕生である。同七年、二十八歳、松坂に帰り医者を開業した。京都遊学は、目的の医学修行はもとより、生涯の学問に入る下地を養い、多大の学識を身につけた点、大変有意義なものであつた。彼に、松坂出立から帰郷までの約五年半に及ぶ『在京日記』という記録があるが、読んでいて大変面白いものである。書かれているのは、学問のことだけではない。歌会、四季の行楽、芝居見物、乗馬その他、その生活ぶり、書きぶりは、学問修行というより、自由奔放に遊んでいる様な楽しいものだ。

帰郷後、後に師事することとなる賀茂真淵の『冠辞考』に接したことは、彼の生涯の大事件であつたと言えるだろう。彼の一生の学問の方向を決定したとまで言えば大層かも知れないが、真淵の名を知り、大いに敬服したのである。後に、彼はこの時のことを語っている。「国にかへりたりしころ、江戸よりのぼれりし人の、近きころ出たりとて、冠辞考といふ物を見せたるにぞ、県居大人（真淵）の御名をも、始めてしりける、かくて其ふみ、はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりことゝほく、あやしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立かへり今一たび見れば、まれくには、げにさもやとおぼゆるふしぐもいできければ、又立かへり見るに、いよくげにとおぼゆることおほくなりて、見るたびに信ずる心の出来つゝ、つひにいにしへぶりのことおぼの、まことに然る事をさとりぬ、かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が万葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける」。数年後の「松坂の一夜」は、運命の一夜であつたのかも知れない。

「僕の和歌を好むは、性也。又た癖也」。

歌論『あしあけおぶね排蘆小船』は、宣長の処女作とされているが、生涯公表されず、篋底に秘められた。文章は雑然としているが、後に展開される「もののあはれ」論の萌芽が既に見られ（もののあはれに触れているのはわずか二箇所）、彼の文学説に一貫している文学の自律性が冒頭に闡明されている。歌は政治を助けるためではなく、身を修めるためにあるのではない。「たゞ心に思ふことをいふより外なし」である。様々な牽強附会の説から、歌を解放しようと言われたのが本書であり、説かれていたのは、「樂しみをばねがひ、苦しみをばいとひ、おもしろきことはたれもおもしろく、かなしきことはたれもかなしきものなれば、只その意にしたがふてよむ」歌の道である。また、「歌と云ふものは、みな実情より出づる也」と、実情と言言葉が多く用いられ、実情論を成しているのだが、これは「もののあはれ」論と峻別して考えてみる必要はないであろう。堂上・地下の差別や古今伝授に対する批判は、町人歌人宣長ならではないものだ。

歌人は定家、歌集は新古今を最上とし、歌を学ぶには三代集を読むのがよいとしている。また、詠歌の第一義は、詞を選ぶことだという考えは、心を第一と考える者には、意外であったろう。しかし、本書で最も注目すべきは、人情の機微に対する宣長の透徹した洞察と、契沖への敬意とであろう。前者は、後の『いそのかみききあひて石上私淑言』、『源氏』論『しげん紫文要領』に一層詳しい。

宣長は、契沖から歌学の何たるかを学び、目が覚めた。しかし、彼が契沖から学んだのは、学問の方法だけではないだろう。その空前の学問の精神をも学んだと考えなければ、『排蘆小船』で語る、契沖との出会いの感動も『玉勝間』の「業平朝臣のいまはの言の葉」の文章もわからなくなる。

後年、契沖の学説への批判が目立つようになるが、晩年まで彼を思い続けたことを考えると、宣長の彼に対する敬意は、生涯揺らぐことがなかったと言えるだろう。彼は契沖からの賜物について語る。「こゝに難波の契沖師は、はじめて、一大明眼を開きて、此道の陰晦をなげき、古書によつて、近世の妄説をやぶり、はじめて本来の面目をみつけた。大凡近來此人のいづる迄は、上下の人々みな酒に多し、夢をみてゐる如くにて、たはひなし。此人いでゝおどろかしたるゆへに、やうく目をさましたる人々もあり。されどまだ目のさめぬ人々が多き也。予さひはひに此人の書を見て、さつそくに目がさめたるゆへに、此道の味、をのづから心にあきらかになりて、近世のやうのわるきことをさとれり。これひとへに沖師のたまもの也」。これは、契沖の書に接して、初めて歌道の味わいを知った宣長の感動の吐露なのであり、彼は契沖の創造性

に敬服し、彼のために弁護している。「或人契沖を論じて云はく、歌学はよけれども、歌道のわけを一向にしらぬ人也と。予これを弁じて云はく、これ一向歌道をしらぬ人の詞也。契沖をいはく、学問は申すにをよばず古今独歩なり。歌の道の味をしること、又凡人の及ばぬ所、歌道のまことの処をみつけたるは契沖也。されば沖は歌道に達して、歌をえよまぬ人也。今の歌人は、歌はよくよみても、歌道はつやくしらぬ也。そのよくよむと云ふ歌にも、ときぐ大きな誤りのみ多し。さて又ちかごろ、契沖をももどきて、なを深く古書をかながへ、契沖の考へもらしたる処をも考ふる人もきこゆれども、それは力を用ゆれば、たれもあること也。されどみな契沖の端を開きをきたることにて、それにつきて、思ひよれる発明なれば、なを沖師の功に及ばざること遠し。すべてなにごととも始めをなすはかたきこと也」。

契沖が国学の祖とされるのは、前述したように、彼の学問の新しい方法だけによるのではなく、歌道の味を誰よりも深く知ったことによる。宣長が『古事記伝』を完成させることが出来たのも、彼の学問の実証主義だけによるのではなく、『古事記』の味を誰よりも深く知ったからであらう。「記伝」が完成した頃には、契沖は遙か後方にいたであらうが、宣長が彼を侮蔑したはずはない。

遊学後間もなく、彼は門弟をとり、生涯続くこととなる古典の講釈を開始する。家業とともに、一途に古典研究に勤しんだ宣長の一生に、特筆すべき変化は求め難い。『本居宣長』を書いた小林秀雄が言う通り、彼の波瀾は全て、彼の頭の中にある。彼の古道説、或いは国家思想には、強い言葉が目立ち、その言説だけを拾い読みして、彼を狂人として興ずれば、彼の生涯も少しは華やかに見えようが、早計であらう。彼は極めて理性的な常識人であり、リアリストとして環境に随った。「医のわざをもて産とすることは、いとつたなく、こゝろぎたなくして、ますらをのほいにもあらねども、おのれいさぎよからんとて、親先祖のあとを、心ともてそこなはんは、いよく道の意にあらず、力の及ばむかぎりには、産業をまめやかにつとめて、家をすさめず、おとさざらんやうをはかるべきものぞ、これのりなががこゝろ也」。

宝暦十三年は、国学史上記念すべき事件が生じた年である。新上屋での、宣長と賀茂真淵の対面、有名な「松坂の一夜」である。時に、宣長三十四歳、真淵六十七歳。老大家と新鋭学者の、最初で最後の会合である。当時のことを、彼は『玉勝間』に書いている。「宣長三十あまりなりしほど、県居大人のをしへをうけ給はりそめしころより、古事記の注釈を物せむのこゝろざし有て、そのことうしにもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとより、神の御典をとかむと思ふ心ざしある

を、そはまづからごころを清くはなれて、古へのまことの意をたづねえずはあるべからず、然るにそのいにしへのごころをえむことは、古言を得たるうへならではあたはず、古言をえむことは、万葉をよく明らむるにこそあれ、さる故に、吾はまづもはら万葉をあきらめんとする程に、すでに年老て、のこりのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにいたることえざるを、いましは年さかりにて、行きき長ければ、今よりおこたることなく、いそしみ学びなば、其心ざしとぐること有べし、たゞし世ノ中の物まなぶともがらを見るに、皆ひきよ所を経ずて、まだきに高きところにのぼらんとする程に、ひきよところをだにうることあたはず、まして高き所は、うべきやうなければ、みなひがことのみすめり、此むねをわすれず、心にしめて、まづひきよところよりよくかためおきてこそ、たかきところにはのぼるべきわざなれ、わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはら此ゆるぞ、ゆめしなをこえて、まだきに高き所をなのぞみそと、いともねもころになん、いましめさとし給ひたりし、――」。宣長は『古事記』研究の志を堅めたであらう。真淵は有望の若者を得た祝宴を開いたと言われている。宣長は真淵に入門し、以後、二人の関係は、万葉に関する質疑応答の文通によって続くこととなる。しかし、宝暦十三年は、これだけではない。彼の生涯の思想「もののはれ」論が展開された年でもある。

『石上私淑言』は「もののはれ」論を基軸とする、問答体で書かれた歌論で、宣長は『排蘆小船』の改稿を考えていたのかも知れないが、これも未完に終わっている。しかし、文章構成は『排蘆小船』より一段と整理されており、また、その考証的記述を読めば、本書を『排蘆小船』の延長と考えるより、文献学の出発点と見る方が妥当ではないだろうか。『古事記伝』着手の用意が既に見られ、古学者宣長が随所に顔を出している。だが、本書の要は、やはり「もののはれ」論であり、「もののはれ」をしる心から和歌に接近した点に、彼の卓抜なセンスがある。

「さて阿波礼といふは、深く心に感ずる辞也。是も後世には、たゞかなしき事をのみいひて、哀の字をかけども、哀はたゞ阿波礼の中の一つにて、阿波礼は哀の心にはかぎらぬ也」。「あはれ」とは、哀しみの心だけを言うのではない。全ての心に渡る言葉である。いつ頃から「哀」の字が当てられ、この言葉が硬直してしまったのかはともかく、宣長によつて「あはれ」の意味が捉え直され、言葉が息を吹き返す。「阿波礼といふ言葉は、さまざまいひかたはかはりたれども、其意はみな同じ事にて、見る物、聞く事、なすわざにふれて、情の深く感ずる事をいふ也。俗にはたゞ悲哀をのみあはれと心得たれ共、さにあらず。すべてうれし共、おかし共、たのし共、かなし共、恋し共、情に感ずる事はみな阿波礼也」。では、歌について、彼はどの様に考えていたか。歌の字義など

どうでもよい、考えるに足らぬことだ。大切なのは歌の本義だと言う。この考え方は晩年まで一貫している。詳細は後に『玉勝間』から引用することに、歌の本義を、彼はどう考えているか簡単に見ておく。

「そも此歌てふ物は、いかなる事によりていでくる物ぞ。答へて云はく、歌は物のあはれをしるよりいでくるもの也。問ひて云はく、物のあはれをしるとはいかなる事ぞ。答へて云はく、古今序に、やまと歌はひとつ心をたねとして、万の言のはとぞなれりけるとある、此心といふが則ち物のあはれをしる心也。次に世の中にある人、ことわざしげき物なれば、心に思ふ事を見る物聞く物につけていひ出だせる也とある、此心に思ふ事といふも、又則ち物のあはれをしる心也」。歌が「ものあはれ」をしる心から生ずることはわかった。では、肝心の歌の本義は、どこに見出すべきか。宣長は答える。「たとへば今人せちに思ひて、心のうちにこめ忍びがたき事あらむに、其事をひとり言につぶくといひつゞけても、心のはれぬ物なれば、それを人に語りて聞かすれば、やゝ心のはるゝ物也。さて其聞く人もげにと思ひてあはれがれば、いよくこなたの心ははるゝ物也。さればすべて心にふかく感ずる事は、人にいひきかせではやみがたき物也。あるひはめぐらかなる事、おそろしきこと、おかしき事なども、見聞きて心に感ずる時は、必ず人にもいひきかせまほしくて、心にこめがたし。さていひきかせたりとても、人にも我にも何の益もあらねども、いはではやみがたきは自然の事にして、歌も此心ばへある物なれば、人に聞かする所もつとも歌の本義にして、仮令の事に「人に見出す所」は、歌の本義を「人に聞かする所」に見出したのは、宣長より前には、誰一人いなかたであらう。或いは、歌を詠まぬ人も、彼の言うことに同感するのではないか。私たちは、心を晴らすために歌うのである。それを聞く人が共感してくれば、この上ない幸いではないか。「人に聞かする所」は、歌に限らず、広く文学の本義と言つてもいいのではないか。ところで、宣長は随所に、恐らく慎重に、「ものあはれをしる」という言い方をしている。吉川幸次郎は「『物の哀を知る』とは、感動によつて存在の本質を認識するという行為であり、能力である。且つそれは認識の方法として、もつともすぐれる」(「文弱の価値」)と言い、「ものあはれ」論を哲学説として考えている。「ものあはれ」論は、感情論ではないだろう。感情に、物の心、事の心を知る力はない。私は「ものあはれをしる」とは、共感する認識力だと考えたい。

『紫文要領』は、宣長最初の『源氏物語』論であり、やはり、「ものあはれ」論が中軸となっている。後記を読むと、旧注の説に囚われず、大変画期的な「源氏」論を書き上げた、彼の自信が窺える。彼は、儒仏の説や勸善懲惡説から、全く自由であった。式部の心ばえに一途に

寄り添い、「源氏」を何度も心読した成果が本書であり、また「玉の小櫛」である。本書の大半を占めるのは、「大意の事」であるが、宣長は先ず、「蛸」の源氏と玉鬘の遣り取りを解釈することで、式部の『源氏物語』に込めた本意、下心を明らかにする。彼は、源氏の物語論に、作者の物語観を読む。村岡の『本居宣長』では、「本居が源氏物語蛸の巻の一節の解釈」として、附録となっている。大変面白い解釈であるから、看過出来なかつたのであろうが、しかし、宣長の注は大変長く、煩瑣な引用は不親切であるから、遺憾ながら割愛する。

「物の心をわきまへしるが則ち物の哀れをしる也。世俗にも、世間の事をよくしり、ことにあたりたる人は、心がねれてよきといふに同じ」。「もののはれ」をしる心とは、世間に揉まれて、様々な経験を重ね、人の哀しみを共に哀しみ、人の喜びを共に喜ぶ、人情の機微に通じた、共感する認識力である。「源氏」は「もののはれ」を知る人をよき人とし、人の哀しみや憂えを見ても何とも思わない「もののはれ」を知らぬ人を悪しき人としているのであり、儒仏に言う善悪や教誡とは関係がなく、その様な観点に立って「源氏」を読むのは、牽強附会であると宣長は言う。観懲説で「源氏」の価値を断ずることは出来ない。物語中、例えば、光源氏の様に不埒な振る舞いがある人でも、彼は「もののはれ」を深く知った人であるから栄えたのであり、「もののはれ」を知らぬ人は、悪い行いがなくても、作者に大切に扱われていない。式部の登場人物に対する価値判断の基準は「もののはれ」を知ると知らぬとにある。「世の中にありとしある事のさまぐを、目に見るにつけ耳に聞くにつけ、身にふるゝにつけて、其のよろづの事を心にあぢはへて、そのよろづの事の心をわが心にわきまへ知る、是れ事の心を知る也、物の心を知る也、物の哀れを知るなり」。式部の本意が、読者に「もののはれ」を知らせることにあつたなら、『源氏物語』五十四帖は「物の哀れをしるより外なし」となる。簡単明瞭であるが、彼の考察は深く、細部にまで至っており、その上で「物の哀れをしるより外なし」と結論した彼の「源氏」観は、空前絶後と言える。

彼の生涯の「源氏」愛読は、式部の心ばえを見つめ、彼女の語る所にひたすら耳を傾けることであつた。その成績が「もののはれ」論なのである。村岡は、宣長の人格を評して、深みがないとしているが、果たしてどうであろうか。なるほど、宣長は楽天的な人であつたかも知れない。しかし、深みのない人ではなかつたであろう。深みのない者に「もののはれ」論が書けるとは思えない。彼は、人の心によく通じた人であつた。

明和元年（一七六四）宣長三十五歳。この頃、『古事記』研究に本格的に着手。一説では『古事記伝』起稿はこの年とされている。師真淵と



の文通による質疑応答は、時に、師の叱責を受けながらも、明和五年まで続いた。そして、翌六年、真淵は没した。宣長の日記には一言「不堪哀惜」とだけある。しかし、彼の真淵に対する敬慕の情が大変深かったことは『玉勝間』を読めばよくわかる。真淵は、神典を解き明らめるために、「万葉」に生涯を費やした。しかし、老齡の身、竟に『古事記』解説には至らなかつた。真淵の精神は、宣長に受け継がれ、彼は古道の学に邁進することとなる。

私が最初に読んだ宣長の著書は、畢生の大著『古事記伝』である。完成までに三十五年の歳月を費やした本書は、彼の代表作であるばかりでなく、今日でも、『古事記』を読むのに、本書に拠らねばならぬのだから、正に不朽の書である。本書を書き終えた彼は、喜びの歌を一首詠んでいる。

古事の記をらよめばいにしへのてぶりことゝひきゝみるごとし

『古事記』と親しく付き合つてみて、やつと「いにしへのてぶりことゝひ」を目の当たり聞き見るに至つたと解しても、間違いではないだろう。『古事記』は、現存最古の歴史書であるが、後に、正史として『日本書紀』が完成すると、人々は「書紀」を尊び、『古事記』の名さえ知らぬ人が多くなつた。何故かと言うと、当時、漢学が盛んで、何事も漢国の様を好み、「書紀」が漢国の国史に似ているのを喜んで、『古事記』の素朴な文章は正しい国史の体裁ではないと軽んじ、取り上げる人がいなくなつたからである。

「書紀」の陰に隠れ、千年余の歳月が流れたのだが、宣長に至つて、

『古事記』の真価がアヒカチ闡明された。「古記典等イニシヘブミドケノスベテノサダ総論」に、「抑意と事

と言とは、みな相称アヒカチへる物にして、上ツ代は、意も事も言も上ツ代、後ノ代は、意も事も言も後ノ代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後ノ代の意をもて、上ツ代の事を記し、漢国の言を以テ、皇国の意を記されたる故に、あひかなはざること多かるを、此記は、いさゝかもさかしらを加へずて、古へより云ヒ伝へたるまゝに記されたれば、その意も事も言も相称で、皆上ツ代の実なり、是レもはら古への語言を主としたるが故ぞかし、すべて意も事も、言を以て伝るものなれば、書はその記せる言辞ぞ主には有ける」と、彼は、「古への語言を失はぬを主」とした『古事記』を最上の史典と定め、書紀はその次だとした。

宣長学の実証主義客観主義は誰も言う所だが、彼の心中に、古の「ことゝひ」が聞こえていたからこそ、『古事記伝』は完成したのである。先日、小林秀雄の『本居宣長』を読んでいたら、面白いことが書いてあるのに気が付いた。笹月清美の研究に教えられたそうだが、宣長

は、訓の難しい個所では、時折直観によって断を下しているようだ。彼は、学者として、客観的帰納的精神に立脚してはいるが、さらに耳を澄まして、古の「ことゝひ」を聞こうとする。実証精神と彼の耳が一つになる。その様な例がないか探してみた。伊邪那岐命と伊邪那美命が夫婦のかためをするために、柱を廻り、声をかけあう場面である。二神は柱を廻り、まず伊邪那美命が「あなにやしえおとこを」と言い、次に伊邪那岐命が「あなにやしえおとめを」と言うのだが、伊邪那岐は、女が先にものを言うのはよくないと言う。

漢文は「伊邪那美命先言阿那邇夜志愛袁登古袁後伊邪那岐命言阿那邇夜志愛袁登賣袁各言竟之後告其妹曰女人先言不良」だが、問題は、最後の「不良」である。宣長は訓を定めかねて、種々例をあげながら考察し、三つに絞る。一つには、ヨカラズ。二つには、サガナシ。三つには、フサハズ。熟慮の末、彼はフサハズに決定する。何故か。「さて右の三つをならべて今一度考えるに、なほフサハズと訓ムぞまさりて聞ゆる」からである。古の「ことゝひ」が、宣長の耳に聞こえている。実証主義的手法に、心中の耳が協力しなければ『古事記』の注釈は完成しない。村岡の言う通り、「記伝」は『古事記』だけではない、古典の注釈として空前絶後なのである。

宣長は「かみ」について、どう考えていたか。『古事記伝』三之巻の

注釈には、「迦微カミと申す名義は未ダ思と得ず」、「かみ」と言う語の語義は分らないと書いている。彼に考えることが出来たのは、「かみ」の語義ではなく、「かみ」とは何か、である。或いは、古人が、どのような存在を「かみ」と認めていたかと言うことだ。宣長曰く、「さて凡て迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云はず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏かしこき物を迦微とは云うなり」。しかし、すぐれたるとは、尊きことや善きことばかりを言うのではなく、悪しきものや奇しきものも、すぐれて可畏きものは、神と言うのである。「抑迦微は如此く種々にて、貴きもあり賤きもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪きもありて、心も行もそのさまぐに随ひて、とりぐにしあれば、大かた一むきには定めては論ひがたき物になむありける」。天皇が神であることは言うまでもないが、一国一里一家の内にも、ほどほどに神である人がある。神代の神たちも、多くは、その代の人であり、その代の人皆神であったから神代と言うのである。その他に、雷、龍、木霊、狐、虎、狼なども神である。「然るを世人の、外国にいはいゆる仏菩薩聖人などと、同じたぐひの物のごと心得て、当然シカルベき理と云ことを以て、神のうへをはかるは、いみじきひがことなり、悪く邪なる神は、何事も理にたがへるしわざのみ多

く、又善き神ならむからに、其ほどにしたがひては、正しき理のまゝにのみもえあらぬ事あるべく、事にふれて怒り坐る時などは、荒びたまふ事あり、悪き神も、悦ばば心なごみて、物幸はふること、絶て無きにもあらざるべし——」。善い神だからと言って、善い行いばかりではない。悪い神だからと言って、悪い行いばかりではない。神は、人間が考え出した理で太刀打ち出来る存在ではない。「いと尊くすぐれたる神たち御うへに至りては、いとく妙に靈アヤシく奇クスしくなむ坐シませば、さらに人の小き智以て、其ノ理りなどちへのひとへも、測り知らるべきわざに非ず、たゞ其ノ尊きをたふとみ、可畏きを畏みてぞあるべき」。大切なことは、「かみ」とは何かであつて、「かみ」の語義ではない。古人の間で「かみ」と言う言葉がどの様に使われていたか、宣長は言葉の使い様を重んずるのである。「物まなびするともがら、古言の、しかいふもとの意を、しらまほしくして、人にもまづとふこと、常也、然いふ本のころとは、たとへば天といふは、いかなる意ぞ、地といふは、いかなる意ぞ、といふたぐひ也、これも学びの一ツにて、さもあるべきことにはあれども、さしあたりて、むねとすべきわざにはあらず、大かたいにしへの言は、然いふ本の意をしらむよりは、古人の用ひたる意を、よく明らめしるべき也」(玉勝間)。これと全く同じ発言が『うひ山ぶみ』にある。生涯変わることのなかつた、学者宣長の信条である。

彼の古道説を国粹主義と見るのは、造作もないことだが、何故、彼は道を説かなければならなかつたのか。何故、執拗に漢意を排斥しなければならなかつたのか。私には、彼の主張の陰に、もどかしい気持ちを感じられる。彼の古道説に誇張があつたにしても、私には喧しく聞こえはしない。「直毘靈」ナオビノミタマを読むと、「美知とは、此記に味御路と書る如く、山路野路などの路に、御てふ言を添たるにて、たゞ物にゆく路ぞ、これをおきては、上代に、道といふものはなかりしぞかし」とある。また、「物のことわりあるべきすべ、万の教へごとをしも、何の道くれの道といふことは、異国のさだなり」と書かれている。道とは歩く道のことで、その外に道と言うものはなかつた。形而上的な道をとやかく言うのは異国の沙汰だと言う。続きを読んでみると、「実は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど、道ありしなりけり」。「神の道」はあつたのである。しかし、「あしはらの水穂の国は、神ながら言挙げせぬ国」であるから、道路の意味の道のほかに、「何の道くれの道」と言葉にすることはなかつた。だが、「神の道」と言う言葉はなかつたけれども、「神の道」はあつた。「書籍といふ物渡参来て、其を学びよむ事始まりて後、其国のでぶりをならひて、やゝ万のうへにまじへ用ひらるゝ御代になりてぞ、大御国の古の大御てぶりをば、取分て神の道とはなづけられたりける、そはかの外国の道々にまがふがゆゑに、神とい

ひ、又かの名を借りて、こゝにも道とはいふなりけり」。これが、高御産巢日の御霊によつて、伊邪那岐・伊邪那美が創始し、天照大御神が受け保ち、伝えられた道、神道であろう。また、『玉勝間』に、「そもく道は、もと学問をして知ることにはあらず、生れながらの真心なるぞ、道には有りける、真心とは、よくもあしくも、うまれつきたるまゝの心をいふ、然るに後の世の人は、おしなべて漢意にのみうつりて、真心をばうしなひはてたれば、今は学問せざれば、道をえしらざるにこそあれ」とあるが、生まれながらの真心こそ、漢意に影響されることのなかった、古人の心であり、「神の道」に生きた古人の心に適う心なのではないだろうか。

宣長は、異国の聖人の道をさかしらとして排斥した。彼には、聖人の考え出した偉そうな説など、余計物としか思えなかつた。そのために、聖人批判、漢意批判は激しくなるのだが、私は、彼の主張の真意を思つてみるのである。

宣長曰く、「人はみな、産巢日神の御霊によりて、生れつるまに、身にあるべきかぎりの行は、おのづから知てよく為る物にしあれば、世中に生としいける物、鳥蟲に至るまでも、己が身のほどくに、必あるべきかぎりのわざは、産巢日神のみたまに頼て、おのづからよく知てなすものなる中にも、人は殊にすぐれたる物とうまれつれば、又しか勝れたるほどにかなひて、知べきかぎりはしり、すべきかぎりはする物なるに、いかでか其上をなほ強ることのあらむ」。

至極温和的な考えで、宣長の性格がよく出ている文章だ。

また、「ほどくにあるべきかぎりのわざをして、穏しく樂く世をわたらふほかなかりしかば、かくあるほかに、何の教ごとをかもまたむ」。

「神の道」のまにまに、皆が穏やかに楽しく暮らすことが望ましい、その思いが、彼の漢意批判となつたと考えてはいけないだろうか。

彼の思想を分析するのは、研究者の仕事だ。しかし、仕事に熱中するあまり、人間宣長を失念してはいないだろうか。研究者は、実証的学者と「狂信者」の統一に忙しく、未だに困惑しているようだが、彼を二分して考えるから、事が面倒になる。素人の私は呑気なものだから、彼を二分して考えてみることはない。したがって、統一も何もないわけである。故に人間宣長に親しんでいられるのだ。

「人は人事を以て神代を議るを、我は神代を以て人事を知れり」。宣長は、理性の人として、空理空論を斥けた。「無きことを、理を以て有げいひなす」ことを嫌つた。「人の小さき智以て」神の上を推し量ることに否定的であり、自戒してもいた。「人事を以て神代を議る」ことは、さかしらである。「たゞ其尊きをたふとみ、可畏きを畏みてぞ」あるべきである。しかし、彼は理を全て否定したのではない。私の管見に

よれば、彼がはっきりと闡明した理が、ただ一つだけある。或いは妙理と言ふべきであろうが、「善悪たがひに相根ざす理」である。「善悪たがひに相根ざす」理とは何か。『古事記伝』から全文を引用したいが、あまりに長くなるから、簡単に述べる。彼は「神代を以て」世間のあるべき理を知ったのである。「善悪たがひに相根ざす理」とは、吉善事ヨコトから凶悪事が生じ、凶悪事から吉善事が生じ、吉凶互に移り行く理である。また、凶悪事はあつても、終に吉善事には勝てず、人は凶悪事を嫌ひ、吉善事を行ふべき理である。彼は、「奇しきかも、靈しきかも、妙なるかも、妙なるかも」と、注を結んでゐる。ここで宣長が言つてゐることは、良い事もあれば、悪い事もあると言ふ意味ではないだろう。煎じ詰めれば一つだが、凶悪事は吉善事から生まれ、吉善事は凶悪事から生まれると言ふ意味だ。彼にはっきりと説くことが出来た理は、この妙理ただ一つだと言つていい。神代の黄泉の段から始まり、今の代に至るまで、和漢の変化の事跡を見れば、妙に悉く、この理にあたつてゐると彼は言う。彼は『古事記』を信じ抜いた。

村岡は、宣長学の本質的意義を文献学とするも、「宣長学は、文献学たる埒外を出で、単に古代人の意識を理解するに止らないで、その理解した所を、やがて、自己の学説、自己の主義として、唱道するに至つてゐる」として、文献学の変態として、宣長学の古代主義を指摘し、彼の学問を全体として、文献学的思想と考へてゐる。村岡はこの変態の心理的根拠として、国家思想、經驗的不可知論的思想、さらに、それらの根拠として、敬虔的思想などを列挙してゐるが、読んでゐると、宣長の顔がぼやけてくる。

「宣長学は、真淵によつて大成された、換言すれば、その契沖から啓発された根本の精神や学風を、真淵の学風の影響によつて発展させて、中古学よりは、一層完全の意義に於ける、文献学を成すに至つた」。宣長は「古のこゝろ詞をたづぬる」学問は、真淵から始まつたと書いてゐる。道の学問に志した頃から、宣長にとって、真淵は、契沖よりも遙かに大きな存在となつていたであらうし、真淵の影響で、彼の学問も、道学的性質を帯びるようになったのであらう。宣長学が一面古道説となつたのも、真淵の影響であると村岡は言つてゐる。しかし、宣長が、真淵の思想に全く感染してしまつたとは言ひ難い。例えば、歌については、真淵は頑なな万葉主義者であるが、宣長は新古今主義であり、しかも、宣長の文学説の柔らかであるのに対して、真淵の万葉主義は、古代主義の手段となつてゐる。村岡曰く、真淵の古学は客観的文献学ではなく、主観的古代主義である。無論、宣長は、師から少なからず影響を受けてゐるのだから、宣長学にも、厄介な問題が生じてくるわけである。先に

少し触れたが、文献学と古道との対峙である。村岡は、客観的説明的古代学と主観的規範的古代主義との対峙と言う。

村岡曰く、

「彼の国家思想、尊王思想の奥底には、国家及び天皇に対する絶対的尊信がある。彼の実証的不可知論的思想の根底には、神秘思想がある。而して、絶対的尊信と神秘思想との両者は、敬虔思想といふ彼の宗教的信仰によつて、根拠せられてゐる」。なるほど、絶対的尊信は、彼の古伝説信仰と引き離せないし、神秘思想も同様である。では、敬虔思想は何に因るのか。私は、長い間の『古事記』注釈の仕事に因ると考へるのだが、村岡の考へは愚見と異なる。「固より、古伝説の研究、即ち、古代人の意識のうちから、得て来たものではない」と言う。村岡は、宣長の敬虔な人格に因ると言えばそれまでだが、考へてみるべきは、彼の敬虔な人格の成因であるとし、一つには、垂加神道の影響、二つには、彼の家の宗教、浄土宗の影響と考へている。果たしてどうであろうか。

ここで、小林秀雄の『本居宣長』から引用しておきたい。

「宣長の敬虔性を養つたものとして、垂加神道と太宰学との影響、これに加えて、その家庭の宗教たる浄土宗的信仰の習性が挙げられ、こうして養われた彼の心性に、国家思想と不可知論的思想が協力したと解するのである。なるほど、それなら、宣長という人間を、引裂かないで済むかも知れないし、村岡氏が結論しているように、不可解に見えていた宣長の古伝説信仰の態度も、そういう風に、その学問の由来するところを、分析的に求めて行けば、『理解し得べき』ものとなる。しかし、どうであろうか。この『理解し得べき』結論の語るところは、これには誰も反対はしまいというだけの事ではないのか。難題を、実際に生きてみせた宣長の努力の緊張が、そういう全く消極的な意味合のうちに、弛緩し衰弱して了うという事になるだけではないのか」。さらに、「垂加とか太宰学とかと、いろいろと取集めてみても、そういう資材なり、手段なりをどう扱つて、どういう風に開眼するに到つたかという、宣長の思想の自発性には触れる事は出来まい。それを逃しているのでは、宣長の個性に推参したと見えても、やはり、これに到着せず、その外側を巡つていたという事になりはしないか」。これは分析から直観に到るのではなく、直観から分析に移るといふベルクソンから学んだ批評家小林の手法である。村岡と小林と、どちらが宣長の核心により近づき得たか。しかし、これくらいにしておく。

宣長の人格について、一言しておく。

彼は、實際家として、与えられた環境に随順し、無理に我を通すことはしなかった。穏やかで、円満、角々しい所がなく、余裕のある人であった。学問のほうは天才だが、生活は、何一つ奇行、波瀾のない、平凡なものであった。また、激しく儒仏を排撃したのは、学問の上だけで

だ。生活者として穏健であったことは、彼の著書を読めばよくわかるし、苦勞人で、実に人間が練れていた。

また、宣長は無類の桜好きであった。花見にもしばしば出かけ、自宅にも植え、それだけなら、ただの桜好きだが、遺言書には奥墓に植えるようにと書き、自ら付けた諡は「秋津彦美豆桜根大人」である。また、桜の歌の数は膨大で、「枕の山」には、三百首以上も収められている。彼の桜好きは伝えようとして伝えられるものではない。

本居宣長は、享和元年（一八〇一）、七十二歳で歿した。死の前年、遺言書を執筆し、山室山妙楽寺を訪れ、墓所を定めている。その頃に詠まれた歌、

今よりははかなき身とはなけかしよ千世のすみかをもとめえつれば

最後に、彼の遺言書を略書したいのだが、納棺、埋葬、葬送、葬式、墓地その他についての詳細な指示からなり、凶入りであまりに長いため、遺憾であるが省略してこの雑文を終えることにする。

しき嶋のやまとごころを人とはゞ朝日にゝほふ山ざくら花

了